

所も多かったと聞きましたが、一方では相当酷い扱いを受けたとも聞いている。しかし、豪州人は欧米人と違って、我々黄色人種に対し、いろいろな意味で開けていたといえよう。私が関係した豪兵では余り悪い人はいなかったような気がします。

帰国復員の情報では、我々ラバウルの部隊は中国の次で、昭和二十六、七年頃、最後だと発表されたと聞いた。しかし、米軍の協力もあり、中国の帰国も進んだし、婦人兵の多いラバウルに男の兵隊を長いこと置くことはいけないので早く戻してくれということ、我々の帰国は中国と同じ位になり、五月から七月頃復員した者が多い。

私は昭和二十一年四月十六日、部隊と一緒にラバウルを出港、浦賀へ上陸の予定でしたが、伝染病が発生したという理由で、急遽予定を変更されました。五月七日、故郷名古屋港上陸、同日召集解除、復員となりました。この日は奇しくも私の誕生日だったので。

しかし、戦死された戦友や、戦犯（無実の人もいた）で残された人のことを思うと胸が痛みます。今村

軍司令官は復員後再度ラバウルに帰り、自ら戦犯として服役した後、帰還されていることを知る人は多いと思います。私は何回かの運命の転機を持って生還出来たことを幸せと思っております。

アッツ島要員が 南方スマトラ勤務

岩手県 小山 信 一

私は東磐井郡の藤沢町で大正十一年五月十七日に生まれました。その後昭和七年宮古町へ移り、そこで呉服の店を出していました。兵隊検査は昭和十七年六月で第二乙種合格、第一補充兵となった昭和十七年徴集兵です。

ところが、昭和十八年一月十八日召集されたが、大東亜戦も戦況が逐次悪化してきたためか現役兵より早く入隊となったのです。私は次男でしたが長兄は死亡していた。しかし両親は健在でしたので後のことは何

とかなると思つての応召でした。

入隊は盛岡の北部第六部隊、歩兵第一三一連隊ですが、私は呉服屋で余り歩かなかつたし、体力的には辛かつた。それに入隊が一月ですから寒さがこたえるし、朝水道管に触れると手がくっついてしまう。六か月ぐらいで一期の検閲を受けたが「お前達はアツツ島行きだ」と白いマントみたいなものを着せられて訓練をした。

ところが、六月二十日前後だつたか、部隊移動となり第一三一連隊は全部弘前へ、一切合さいの移動だから大変だつた。汽車の中で「64」の衿章を「16」に替えて営門に入つていった。

今度は引き続いて召集となり、門司で乗船、上海、南支那海、マニラ、スマトラ、シンガポールへと行くことになった。弘前出発は十二月二十三日だつたが、八月頃には動員がかかり、スマトラ行き補充員三百名の名前が全部発表され、同時に一装用の夏服を着せられ直ちに出発できるように装備していた。しかし、船の都合か（帰つて来る船が少なく、途中で沈没してし

まうのが多かつたのでしようか）待機すること約四月近くでした。

出発は弘前―北陸線―京都・大阪―門司の経路で、門司港では一週間ぐらい民間の家に泊り、乗船したが甲板に錠を敷き、玄界灘を北上するのです。朝鮮上陸かと思つたら西へ黄海を横断し上海の呉淞へ上陸したのです。船倉には軍馬が積まれ、船団は五、六隻だつたかと思ひます。

上海で待機となつたのは、敵の潜水艦の關係で退避していたのかも知れない。私達の編成は指揮官に見習士官十二名ぐらい、総員三百名で一個大隊の編成だつたようです。兵站宿舎は博物館を兵舎にしたもので、そこで昭和十九年一月から五月頃まで約五か月間、毎日訓練をやりながら船を待つていたわけでしょう。

五月、上海を出発、台湾高雄へ寄港したが、その時船団が雷撃され見習士官が大分死んだという情報を聞いた。我々の船は「威鏡丸」だつたが、大船団を組んでパーシー海峡を航行、フィリピンマニラへ向かつた。船団のうち二隻が轟沈された。我々の船には自動車が

積んであり、その上で寝ていたが、海が荒れて波を被り沈没したのかと思う程だった。船団は雷撃を受けたが、私たちは幸いにもマニラへ着くことが出来た。

マニラ兵站には二十日ぐらい待機していたが、その時、寺内南方軍總司令部が移動した。我々は真面目に訓練して総司令官に欠礼したというので、指揮官が怒られたという。また、マニラのホテルが米軍の海軍俘虜所になっていて衛兵に立った時、俘虜は「お前達負けるのだよ」と言つて、彼等はノンビリしていた。その頃我々がサイパン玉砕を知つた。

六月、船団五十隻はマニラを出港することになった。その間満州の部隊が南下し、マニラで補充していたが、その時同級生と会つた。そこで缶ビールを貰い、私は友人に歯磨粉をやつた。彼はこれからミンダナオへ行くと言っていたが、彼はついに日本へ帰つて来なかつた。

船団はボルネオのミリに仮停泊した。そこには石油採掘の柱が立っていた。ミリを夕方出発しシンガポールへ入港した。五十隻の船団はその時敵潜水艦の雷撃

を喰い大破の船が出た。船団は三列で行き、前の真中がやられ、右側の二番船が小破という情報だった。

シンガポールに一〜二泊したが、シンガポール港で、独乙の潜水艦を見た。我々の船とすれ違いで、ハーケンクロイツの旗を立てて独乙の水兵が甲板を走りながら手を振っていた。

その間、船を乗り替え、スマトラのパレンバン河を溯航、パレンバンへ上陸、列車でラハト着、南部スマトラ防衛軍となり、第七方面軍司令部にラハトで申告した。その時「お前等何処をどう廻つて来たか」と叱られたが、そこで三百名の補充隊は解散した。

私は独立混成旅団の独立歩兵大隊に配属となり、ベングールの安井隊に配属になった。その後警備交替となりベングールから夕方出発し、翌朝エンガー島へ着いて交替要員として勤務したが、島には約一個大隊いた。エンガー島は密林の中で一寸先は闇で見えない程耳だけが頼りの歩哨は二時間ぐらいだったが、猛獣はいなかつた。

三か月後、今度はマンナへ引き揚げの命令が来て部

隊が集結し、動員がかかりシンガポールへ移動することになった。これは、ビルマでインパール作戦が失敗し、撤退したかららしい。私はマンナに残され、歩兵であるのに野砲隊へ勤務となった。下士官二人、兵六人、他にインドネシア兵補二〜三人、スマトラ義勇軍三十名、これで一個小隊を編成した。兵器は捕獲の口径十五センチぐらいの海岸砲があり、付近には飛行場があり、その警備もしていた。

エンガール島では半分ぐらいマラリアにかかり苦労した。艦砲射撃や直接の空襲は無かったが、バレンバン空襲の時は蝟壺で警備についた。その後は毎日壕掘りが主な仕事、恐らくスマトラは壕だらけになってしまったでしょう。作業は炎天下の重労働で軍靴の中に汗が溜るぐらいだった。シンガポールへ行った本隊は終戦後レンバン島に收容された。

スマトラの軍隊はシンガポールへ集結したので、我々は一〇大隊の警備任務を一個小隊で警備することになった。日本軍は現地で兵補を可愛がっていた。傷や病氣も癒してやるなどしていた。義勇軍も割合に良

かった。一緒に歩哨に立っていたこともあるが（終戦まで）日本語は大分判った。

八月十五日の終戦は知らなかった。知ったのは二十日頃だった。現地人の情報は早いので、停戦協定が結ばれたとのこと、その後、砲も命令もなく射っては不可との特別命令が出た。我々南部の部隊はラハト周辺のパカララム（第一次世界大戦の時の独軍俘虜收容所）に集結した。「お前等（一個大隊）は自活の俘虜だ」と言われた。

連合軍の監視も来ない。その時、銃の菊の紋章は削ってあったが、現地人が兵器を獲りに来るというので配備についた。また、北方で銃声があり、「敵襲」と叫び警備についたこともあった。しかし、直接攻めては来なかった。その頃「上等兵は曹長にする。兵器を持って義勇軍へ来い」と勧誘に来て、日本軍でインドネシア軍へ入った者もいた。三八式歩兵銃一挺持って行った者もいた。義勇軍へ行って、その後帰って来た者もいた。

パカララムで数か月、自活していたが、食糧の備蓄

があった。その後バレンバンへ戻る。その間、現地軍が兵器が欲しく日本軍の連絡車を襲ったというので出動し、連絡兵二人かを救出したことがある。

バレンバンで初めて英印軍に武装解除された。昭和二十一年七月上旬頃か、英軍将校が面接する。カードを持って、何処から来たかと、華僑の通訳を通じ戦犯を調べている。そこで戦犯を発見するのだ。我々はバレンバンで船を待っていたが、食料は煎餅にしたような米飯だった。船はようやく出航し、大竹に着いたのは八月だった。

大竹から列車の中で、一般の人は米の飯、握り飯を食べていた。我々復員兵は「アー握り飯だ」といったので、その人は握り飯を分けてくれた。スマトラで終戦になってから白米の飯は食べていない。握り飯は一年振りだった。南方の抑留生活については余り語られていないが、半ば報復的な仕打、兵糧攻めに遭った抑留者も多い、ある所で、ある人は人道的に、ある所で、ある人は殺意さえ含んだと思う仕打に泣いた。また冤罪のため処刑された者もいた。

私は岩手県の宮古へ直接帰ったが、店は配給制度でやめていたが幸いに家族に変わりはなかった。帰ってからマラリアが出て半年ぐらい悪寒とふるえで、布団を何枚掛けても無駄だった。寒さが終われば四十度を越す高熱で苦しんだものだが、幸いに生を得て今日生きています。マニラで別れて戦没した同級生のことを思い出す。

ラバウル戦線記録

鹿児島県 外園 肇

一、南太平洋波高し

昭和十八年七月十八日、応召、鹿児島第十八部隊通信隊西村隊へ入隊、第八方面軍、暁第七〇四八部隊陸上勤務第一〇六中隊補充要員として召集を受け、当初から前線行きと決まっていた。

第十八部隊の三か月間、初年兵教育（戦時訓練）の毎日であり、我々の行く先である南太平洋の戦況、同